

第12回花の国づくり共励会
花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

平成15年3月27日(木)

【農林水産大臣賞】

- ◎ 石井 義明 49歳 (アルストロメリア)
〒441-3616 愛知県渥美郡

【農林水産省生産局長賞】

- ◎ 成澤 勝司 57歳 (マリゴ、トルコギキョウ、ペチュニア、コチヤウラン、サビア、ロベリア等)
〒365-0062 埼玉県鴻巣市
- ◎ 柴崎 喜好 53歳 (ア化、コチヤウラン、アスパラガス、スマイラックス等)
〒895-2202 鹿児島県薩摩郡薩摩町中津川7741

【(財)日本花普及センター会長賞】

- ◎ 石川 正樹 30歳・石川 結花 29歳 (ゆり)
〒020-0817 岩手県盛岡市
- ◎ 川端 芳彦 45歳・川端 葉子 39歳 (ユリ、トルコギキョウ)
〒501-5302 岐阜県郡
- ◎ 稲田 良弘 67歳 (コチヤウラン)
〒769-0213 香川県綾歌郡
- ◎ 小西 幸彦 60歳 (松盆栽)
〒761-8025 香川県高松市
- ◎ 徳永 健史 62歳 (コチヤウラン)
〒849-0906 佐賀県佐賀市

【農林水産大臣賞受賞理由】

石井 義明 愛知県渥美郡

石井氏は、昭和47年にメロン・エンドウ栽培で就農し、翌48年には花きのストック栽培を始め、アルストロメリア栽培には昭和54年から取り組むことになった。アルストロメリアは、地下茎が地温15℃以下に遭遇しないと花芽を形成しないため年内出荷が困難であった。この問題を地中を冷却するという方法で解決し、当初の水冷式から空冷式チリング装置をいち早く開発して、平成2年には、周年にわたって安定した開花が得られる技術を確認した。その後、栽培面積を拡大し、平成13年には、栽培面積76アール、年間800万本、出荷額6,200万円の規模となり、わが国のアルストロメリア栽培の第一人者となっている。

毎年5月～7月に新しく株を植え付けると、秋から開花が始まり、パテントとの関係で最長4年間、ハウスに据え置いたままの栽培が続くことになる。このため、栽培する品種により収益性が大きく左右されるため、毎年導入される新品种の試作栽培に熱を入れ、過去の栽培体験と照らし合わせながら、栽培すべき品種の選定に取り組んでいる。

切り花生産では、地中冷却を取り入れて、品種構成を考慮しながらハウスごとに開花のピークを調節し、消費者ニーズにあうように、さまざまな花色の品種を出荷し続けている。その結果、家族を主体とする効率の良い生産を行い、週休を取り入れて労働条件も整え、所得率の高い安定した経営を可能としている。

栽培技術としては、地中冷却法の開発以外にも、堆肥センターから供給される堆きゅう肥の投入による土づくり、プラスチック製フラワーバケツ(通称ハナバケ)利用による切り花の収穫作業効率向上、防虫ネット張りや冬期の換気など耕種的防除の徹底による10月～2月の「無農薬の花」出荷といった多くの相違・工夫が見られる。

また、産地のリーダーとして地中冷却方式の普及と産地育成に努めるだけでなく、積極的に消費宣伝活動に取り組み、全国の産地に出向いて出荷規格の全国統一や各産地に適した品種の検討の必要性を説いてまわり、比較的新しい切り花であるアルストロメリアを普及させるため、全国を飛び回っている行動派であり、今後、より生産と消費の伸びを期待したいアルストロメリアのため、氏のそのような努力が高く評価された。

【農林水産省生産局長賞受賞理由】

成澤 勝司 埼玉県鴻巣市

成澤氏の花壇苗の生産・経営の特徴は、他品目を組み合わせて周年生産を行い、施設の効率的な利用と安定的雇用を図っていることである。成澤氏のこの経営を成り立たせているのは、先見的で的確な消費者ニーズの把握とセル成型苗の活用である。

成澤氏が生産を行っている鴻巣市には大型の市場があり、流通拠点になっていることから、地の利を活かし消費動向と消費者ニーズを把握し、新品目・新品种をいち早く導入している。それは、現在人気の高い品種である複色系ビオラ「レモンスワール」、オレンジ系ビオラ「ペニーオレンジ」を他の生産者に先がけて導入していることにその一端が伺える。また、成澤氏は、成型苗をこの地域としては先駆的に導入し、施設での栽培期間の短縮、計画的出荷、均質な製品の大量生産を図っている。他品目を組み合わせて計画的な周年出荷を可能にしていることは、それぞれの品目の特性を把握した上で、セル成型苗からの栽培技術を確認していなければならない。したがって、成澤氏の経営は、長年にわたる努力と高い技術に裏付けられているものである。

花壇苗は、花壇に植えられてから価値を発揮するということから、成澤氏は、消費者にわたってからの品質を重視して花き生産を行っている。つまり、土づくりを高品質苗生産の基礎に位置づけ、堆肥な

どの有機物を多用した土づくりに心がけ、また、出荷前に外気にあてて馴化を行うなどし、消費者の立場に立った生産を行っている。

また、成澤氏は、7年前から現在に至るまで鴻巣花き園芸組合の組合長を務め、組合の活動を長年にわたって支えている。組合は、鴻巣市の公共施設への花壇苗の寄付、地域イベントへの参加等のボランティア活動を行っている。また、組合長としてのリーダーシップを発揮し、土壌消毒用の臭化メチル剤に替わる蒸気消毒の共同利用施設の整備に尽力し、また、フェロモントラップを地域全域に設置してハスモンヨトウの防除に取り組んでいる。これらは、成澤氏が環境保全に配慮した農業を推進している姿勢であって、消費者にも目を向けた高い技術に裏付けされた経営感覚とたゆまぬ技術開発による優れた経営であり、県内生産農家の模範となっていること等が高く評価された。

柴寄 喜好 鹿児島県薩摩郡

柴寄氏は、農家であっても経営のもって行き方次第で、他の産業と同等の収入をあげることができるという考えで、経営改善に取り組んでいる。競争力があって初めて経営が成り立つと考えており、従業員にも、いつもこのことを強調している。

柴寄氏は農薬使用はなるべくさけ、有用微生物の活性化などによる土壌環境の改善に取り組み、病気の発生を抑えることを心がけた結果、葉物のスマイラックス(アスパラガス)においては、ガス消毒をせずに病気の発生を抑えている。また、コチョウランにおいても天然資材(キトサン、木酢、海藻)を活用した栽培技術の蓄積に取り組んでいる。

また、柴寄氏は、コチョウランの草勢・品質向上・生産安定対策として、鉢より一回り大きい不織布ポット(スーパーポット)に素焼き鉢植の苗を入れ、この間にV S菌入り堆肥を入れることで、根の生育が良くなり、草勢、品質、生産性を大きく向上させている。施設面では、冷房、暖房装置を備えた開花専用室(花芽形成と発達)3,762㎡を設け、周年出荷体制を確立している。

改良型ベッド栽培法を開発導入することにより、土壌環境が改善され、単収が飛躍的に向上した(平成13年:32万本/10a)。アイビーの地中暖房設備を取り付け、病気の発生を抑えることに成功している。年間を通しベストの地温環境にすることができ、夏期、冬期も高品質の物を安定的に生産している。

アイビーの出荷基準の見直しも行っており、出荷選別基準を整理し、手頃な単価設定と使いやすい選別基準により、ブーケ用だけでなく、デコレーション、アレンジ(母の日、敬老の日)等に利用され、5年で10倍の出荷量を達成している。

コチョウランの品質管理、市場への販売努力により、50%という高い予約販売を確保している。経営管理については、有限会社化し、年間及び月々の反省検討(従業員と合同で実施)に基づき、その後における生産管理に反映させている。

また、中、長期的な計画に基づき生産の拡大、経営改善に取り組むと共に、日野洋蘭ブランドによる販売系列農家への技術指導により、県内の担い手農家育成にも寄与している等地域社会に与える貢献度等について高く評価された。

【(財)日本花普及センター会長賞受賞理由】

石川 正樹・石川 結花 岩手県盛岡市

石川氏の花き栽培面積は、現在107aで、品目は、全てユリであり、平成13年度の出荷量は約36万本である。当初10aから始めたユリの栽培面積を計画的に拡大し、品質安定と作期拡大のため自己資金も投入して施設の導入を図っており、平成13年には対外的な信用確保を狙いに法人化している。

特に平成14年度の県事業で導入した1棟1,200坪のダッチライト型大型ハウスは、県内では初めてのものであり、注目されている。また、基本技術や品質管理を徹底することにより、ロスのない出荷を行っており、球根代の3.5倍の販売額を確保している。

今後、より一層の施設化を勧め、市場への安定供給を図るための効率的な生産体制を構築するほか、労働条件の改善に取り組むこととしており、将来が期待されていること等が評価された。

川端 芳彦・川端 葉子 岐阜県郡上郡

川端氏は、「切り花」が地域として全く新しい品目として、取り組んだ先駆者であり、現在、この「ひるがのフラワーサークル」は、徐々に生産量を伸ばし、一大産地になろうとしている。ダイコン連作であった川端氏が、高原の冷涼な気候での切花栽培に着目し、産地を作り販路も開拓している。また、「フラワーサークル」設立と同時に花き連作となり、地域の模範として活動されていることが評価されている。また、その経営は、現状に甘んずること無く、直売・郵パックなど次々に消費動向に沿った販売方法を開拓する取り組みや、消費者から得た情報を品種や色の選択に活用するなど、情報のフィードバックも的確に行われている。これらの活動は、他の生産者にも良い刺激となり、花き生産者のみならず高鷺村の農業全般へ良い影響を与えている。

栽培技術については、ダイコン栽培という下地があったとはいえ、短期間でトルコギキョウ・ユリなどの栽培技術を取得し、トルコギキョウの単価も平均価格より高く、育苗にも積極的に取り組み、地域ではほとんど例のないプールベンチを導入するなどの改善・向上意欲は旺盛で研究熱心である。

トルコギキョウの育苗に合わせ、花壇苗の生産も始められたが、この部門に対しては、妻の葉子氏が担当している。また、郡内の2名の女性と「郡上レディースナーセリー」を設立し、郡内の町村に植栽する苗を供給したり、岐阜県認定の「花のアドバイザー」として地域の花の装飾についてアドバイスをを行っている。平成2年より岐阜県では「花の都ぎふ」運動が提唱され、花づくり・花かざりが推進されてきたが、花壇苗生産は、この運動にも呼応した活動となっている。

また、岐阜県発祥の「寄せ植え華道」講座も受講され、自己研鑽にも励まれ、ご主人にも負けぬバイタリティで生産・活動が行われている。

現在、この花壇苗生産は、地域貢献のみならず生産の重要な柱となっている。川端氏の経営努力と積極的な地域生産者への指導・啓蒙は、岐阜県の切花生産の取り組みの模範となるものであり、また、葉子氏も経営の一つの柱を担当し、仕事分担の明確化により積極的な活動をしている。このように優れた実績はもとより今後の活躍がますます期待され、他の農業者の模範として評価された。

稲田 良弘 香川県綾歌郡

稲田氏は、従来からオリジナル品種のメリクロン苗生産による切花までの一貫栽培を行っているが、親株の固体選抜と共に、品質の揃うクローンの比率を高め、施設の回転率を上げることにより単位面積当たりのコスト低減に努めている。また、施設の自動化や軽い不織布製ポットの使用など、低コスト生産を積極的に図っている。

収量、品質を高めるために植え込み材料や鉢にも工夫し、排水性、保湿性の改善に努めているとともに、山上げ栽培やクーラー・暖房機による冷暖房栽培をいち早く導入し、周年出荷体制を確立している。また、周年出荷のローテーションと冷暖房効率を良くするために、温室を細かく区切り、温度、日照等環境制御を行うことにより品質向上につとめている。

販売については、関西の3社に絞ら込むことにより、1年間コンスタントに出荷することが可能になり、それによって市場からの信用を得て、購買需要の多少に関係なく、安定販売を実現している。稲田氏は、名誉農業者として地域の農業振興に尽力しているとともに、県洋ラン生産者協議会のリーダー的存在として、県下の洋ラン振興に貢献している。後継者育成の立場からは、県農業大学校から研修生を受け入れ、洋ラン経営に対する適切な指導を行っている。

さらに、研修後も農業経営に対する相談や技術指導も継続的に実施し、後継者の育成に努めている。

以上のように稲田氏の経営・技術は、常に先駆的・合理的な内容であり、他の模範となっていることが評価された。

小西 幸彦 香川県高松市

小西氏は、鉢の小型化により、出荷までの期間(通常7年以上)をできるだけ短縮することにより、商品の回転率を上げている。また、労働軽減については、緩効性肥料の使用や自動灌水施設の設置、コン

プレッサー付き剪定鋏などのいち早い導入により、省力化に積極的に取り組んでいる。

環境保全の点については、大型の盆栽はかつて山取り(自生のものを掘出し、鉢に仕立てる)が主流であったが、近年、良い材料が少なくなったことや環境保全の面から、実生(タネを播く)または接木栽培を主流としている。

小西氏は、香川県鬼無植木盆栽センターの役員として、地域の盆栽生産の中心的役割を担っており、栽培技術についても新技術を積極的に取り入れるとともに、地域への普及を熱心に行っている。また、後継者育成にも力を注いでおり、地域の小学校で盆栽教室を開催している。

以上のように、小西氏の技術・経営は、常に先駆的、合理的な内容であり、他の模範であるとして評価された。

徳永 健史 佐賀県佐賀市

徳永氏の経営は、コチヨウランの切り花と鉢物の専作経営で、後継者と役割分担を行いながら、経営を行い、高品質な花きの生産と後継者の育成を同時に行っている。

また、栽培面では省力・低コストな栽培管理制御システムの導入による周年安定生産技術の確立、販売面では消費者への直接販売など、先進的な取組がなされている。徳永氏は、特にオリジナル品種の育成に力を入れており、消費者ニーズを十分に取り入れた品種の作出により、市場や消費者からは高い評価を受けている。その他、地元生産組合の鉢物部会の部会長を務めるなど活発な活動をされており、「花き技術・経営コンクール」の出品財にふさわしいものとして評価された。